説教20210228　創世記１５：１－１２、１７－１８（旧約19頁）

　 　ルカによる福音書１３：３１－３５（新約136頁）

　　 「めん鳥の愛」 ３０　　　21-４１８　 ８３

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちの内にもお臨み下さい。

　今の世の中は孤独な社会と言われています。私たちは幼いころからその脅威にさらされて、何とかそれを逃れようとして生きてきたのではないでしょうか。そんな社会にあって、政府は数年前に「関係人口」という概念を打ち出しまして、生涯のうちで家族や親友といったかたち以外にも、生涯にわたって付き合っていける人の数を増し加えていけるように援助をしていこうという方針を打ち出しています。大分県で言いますと、大分県、殊に、別府などですと、定住者が居て、観光客がいる、というのが今までのスタイルで在りましたが、その定住者と観光客の間に、定期的に行き来する人という概念を明確に打ち出しまして、新たな、人々の交わりの形を積極的に創出しようという計画なのです。その定期的に行き来する人、と言うのは別名「風の人」ともネーミングされていまして、なんだか聖霊の働きを連想させる、素敵な名前だと思います。教会の中にも「風の人」がいらっしゃるのではないでしょうか。教会は「風の人」の訪れをいつも心待ちにしています。

さて、その「関係人口」を増し加えていくには、とにもかくにも私たちは集まる、という事をしていかねばなりません。私たちはこの世にあって、集まる、という事が喜びであると同時に、苦痛でもある、という事に気づかされています。そして、今は、集まることの苦痛のほうが、こうじてしまっていて、それなら一人でいるほうがましだしラクだと思っている方々が世にあって増えているのではないでしょうか。

聖書にも様々な人々の集まりの姿が記されています。集まる、という事が一度や二度ではなく定期的になり、永続的になっていくとき、そこに共同体が生まれます。今日の聖書箇所にも様々な共同体が登場しています。アブラハムの属した共同体、ヘロデの属した共同体、そしてファリサイ派というのも一つの共同体でありましょう。そして言うまでもなく教会も一つの共同体であります。教会共同体といった言い方もされますが、そもそも教会と言うのは元のギリシャ語ではエクレシアと言ってそれは集まりという意味なのです。

この教会共同体がそのほかの共同体と違うところは、教会共同体は集まっているところではなくて、徹底的に受け身であって、主イエス様によって、集められている場所であるということです。そこが教会の強いところで、永続的なところであると思います。人々が集まっているところならば、人は嫌になったらやめてしまうでしょうし、その場所を後で悪く言うことも出来るかもしれません。しかし教会は主によって人々が集められているところですから、自分の意志によってそこを去ってしまうという事は起こりえないことでしょう。

今日の聖書箇所では、主が教会に人々を集めるさまを、めんどりが雛をはねの下に集める様子に例えて表現しています。めんどりが子供たちを育てる、その母性愛が、父なる神の無償の愛をたとえているのです。もっとも父なる神の、私たち人間に対する愛は広くて深く、それははかり知ることが出来ないことですので、他にも様々なたとえがなされています。例えば有名な放蕩息子のたとえ話では、放蕩息子は、私たち人間であり、自宅で、その息子の帰りを首を長くして待ち望んでいる父親とは、天の父なる神の事なのです。父なる神の私たちに対する愛はここではその一対一の、フェイス　ツー　フェイスの関係における深みに焦点が当てられているように思います。この世的にピンとくる表現をすれば、二人だけの相思相愛の恋人関係ともいえるかもしれません。一方、めんどりの愛のたとえのほうでは、神の愛の広がりのほうに焦点が当てられているでしょう。つまり主なる神の愛は、数多くの我が子に、無条件に分け隔てなく分け与えられていくのです。

主イエス様は、この愛における深みと広がりとを兼ね備えておられる唯一の方です。そんなイエス様によって、私たちはこの教会に呼び集められているのです。この世的な表現をすれば、私たちは主イエスのリーダーシップと、主イエスとの二人だけの相思相愛の関係に惹かれて、全ての者がこの教会に集められているとも言えるでしょう。

　教会は古くから母なる教会と言われてきました。そうして、めんどりが子を呼び集めるような母性愛が言い顕されてきたのです。私たちは母なる教会に呼び集められ、そこで十字架のイエスキリストを通して、父なる神の愛に入れられているのです。

さて、たとえといいますと、今日の聖書箇所では、興味深いたとえが3つ目につきます。

先ず、旧約のほうで、アブラムの子孫は、主によって天の数えきれない星に例えられています。そして、新約のほうでは、ヘロデがきつねに、主イエス様ご自身がめんどりに称えられています。

ここで旧約の昔に星という無機物に例えられた人々が、時代を下った新約の時代に狐だとかめんどりだとか、その性格によって動物に例えられているというのは興味深いことでありましょう。それは、旧約から新約という時間の経過の中で、ただ美しく光っていた星々のような人間に、その一人一人に性格が与えられて、それぞれの性格や形を成してきたという事でありましょう。

言うまでもなく、狐というのは狡猾でずる賢く、人をだまして利用する者のたとえで在ります。それに加え、狐というのは人間にとって有害でさげすむべき存在であるともユダヤ人たちは考えておりました。ヘロデはイエス様から容赦なく、このような狐の姿に例えられてしまったのです。イエス様はこのことを、イエス様に好意的なごく一部のファリサイ派の人々に耳打ちしたのです。ここで私たちが大変興味深く思わされるのは、ファリサイ派という共同体に属する者たちが、全てイエス様を付け狙ってその命を狙おうとする者ばかりではなかった、という事実です。この事実は、一見、ファリサイ派の中にも、イエス様を案じる者がいたとは、一つの救いであるなあ、というような見方に落ち着くかもしれません。しかしよく考えてみますと、これは私たち人間が持っている、揺れ動く姿の顕れであるのかもしれません。わかりやすく言い換えれば、このイエス様の身の上を案じたファリサイ派の人々は、ヘロデにつくのかイエス様につくのかで、心が揺れて迷っていたのかもしれません。事実イエス様はそのような、この人たちの心の動きを見抜かれたのでしょうか、彼らに「わたしが言ったことをヘロデに伝えなさい」と申し渡しているのです。つまりイエス様は、ヘロデをあの狐呼ばわりしたことが、このどっちつかずのファリサイ派の人々によって、ヘロデに伝えられる危険性或いは可能性をちゃんと承知しておられたのです。

「エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、自分に遣わされた人々を石で打ち殺す者よ、めん鳥が雛を羽の下に集めるように、わたしはお前の子らを何度集めようとしたことか。だが、お前たちは応じようとしなかった。」とイエス様は言われます。これは誰に対して言われたことなのでしょうか。イエス様はこのファリサイ派の人々にこのように言われたのでありますが、イエス様はこのファリサイ派の人々の口を通して、ヘロデに至るまで全てのイスラエルの人々にこのことを言い伝えようとされたのではないのでしょうか。

　イエス様というまことにまことの預言者がエルサレムに来られるまで、アブラハムの子孫であるイスラエルの人々はまことの預言者たちを殺し続け、偽の預言者たちのほうに従ってきました。その結果が、ヘロデという最悪の王様を生んだのだといえるかも知れません。ですから、この時のアブラハムの子孫の共同体の窮状は、一人ヘロデ王のせいにするだけで改善するといったことではありませんでした。

イエス様は、エルサレムにおける過ぎ越し祭という、本来全てのアブラハムの子孫が救われるべきお祭りの最中に御自分の命を捧げられて、そののち復活をされて、『主の名によって来られる方に、祝福があるように』と呼び叫ぶことができる教会の今の時を備えて下さったのです。

私たちは、死という事を思うとき、それが私たち人間にははかり知れない、主なる神によってもたらされる恵みの出来事であるだけに、いわばヘロデ王が支配するような悪い共同体にある時は、それを恵みであるなどとは思ってもみられなくなるでしょう。そんな私たちをみて、イエス様は、「エルサレム、エルサレム」といって嘆き悲しんでおられます。

思い返せば、今日読まれました旧約の昔にはファリサイ派の人々という共同体はなかったのです。アブラムは失望と孤独の中で、主なる神の声を聞き、「あなたの子孫は天の星のように数多くなる」という御言葉をただ信じて、主なる神から信頼され、主なる神と契約をして、そうして将来、子孫が住むべき土地をも与えられるのです。御承知のように、アブラハム自身は、その約束された地に入れられる前に死にましたが、その死に際して、星の数ほどの子孫がその約束の地に入れられる姿を見ながら、喜びの声を上げて、天に召されていったのです。

　今や、私たちも信仰によって星の数ほどのアブラハムの子孫の一人に数えられています。そしてアブラハムの子孫は、主なる神の救いの約束に入れられているのです。イエス様は、そんな数多い私たちを、教会共同体へと招かれています。教会共同体の群れのことを、イエス様はめんどりとそのこどもたちという愛情豊かな関係性に例えられました。天に光る数多くの星々に例えられていた私たちは、今やめんどりとその子供たちに例えられています。このことは教会に集められている私たちの姿を、より明らかにしているのではないでしょうか。天に光る数多くの星々は、教会にあって、お互いの関係性をより広く深めていくように導かれているのです。

しかし、そこには必然的に荒れ野における試練と葛藤とが伴うことでしょう。なぜなら、一方で狐に例えられもする、私たちの人間性は、めんどりと狐の間で揺れ動くものだからです。

主イエス様は、そのような私たち人間の日和見主義や二枚舌などの罪多き行いの数々によって、十字架につかれました。しかし、主イエス様はそんな私たちを見捨てることなく、復活して下さって、今、教会で私たちを導いてくださいます。私たちは、自分の恐れや不安を捨てて、イエス様の霊を自分のうちにお迎えいたしましょう。そして、今日も明日も、その次の日も、私たちを教会へと呼び集めてくださいます、主イエス様とともに、そのよき知らせを呼び求めてまいりたいと願います。

お祈りします

天にいます私たちの父なる神よ

今、私たちはレントの日々を歩まされています。試練の時は教会にあってもこの世にあっても、私たちを容赦なく襲い、私たちは寄る辺なき孤独の心境に、恐怖しています。

どうかそのような私たちを祝福して守って下さい。

あなたの御子イエスの集まりであるこの教会にあって、私たちを、あなたに連ならせ一つにして下さい。

私たちは自分のしゃべることの罪を知らず、知らない間に悪の道に入っていくような罪なものです。どうか私たちの罪をお許しください。

私たちがあなたに憐れみを求め、あなたの大いなる愛のうちに、集められて生かされていくことが出来ますように。

父と聖霊と共に